前編
バビロニア紀行
古代の王たち
R18
Fate/Grand order Fan Book 17
producted by 酒蔵
オジマンディアス×
ギルガメッシュ【令＋卩】
バビロニア紀行　古代の王たち

注　意

▷オジマンディアス×ギルガメッシュ[アーチャー]
オジマンディアス×ギルガメッシュ[キャスター]
が同軸で成立しており、どちらも性行為の描写があります。

▷『Fate/Grand order 第一部 第七章 絶対魔獣戦線バビロニア』に
カルデアのギルガメッシュとオジマンディアスが同行する話です。

▷ゲーム内ストーリーを展開していきます。
前後編合わせてレイシフトからカルデア帰還までの全体の話です。
元のストーリーを把握している事を前提に描写していますので
未履修の方向けではありません。ご了承ください。

物語・人物紹介

《特異点》――それは存在しないはずの過去。本来であれば正史に収束していく微小なパラレルワールドが、人類史の流れを変え、焼失させる程の異常変化を起こした姿。

カルデアの藤丸立香は、歴史に名を残す英雄の写し身である《サーヴァント》の《マスター》として時間を遡り、これまで六つの特異点を修正してきた。

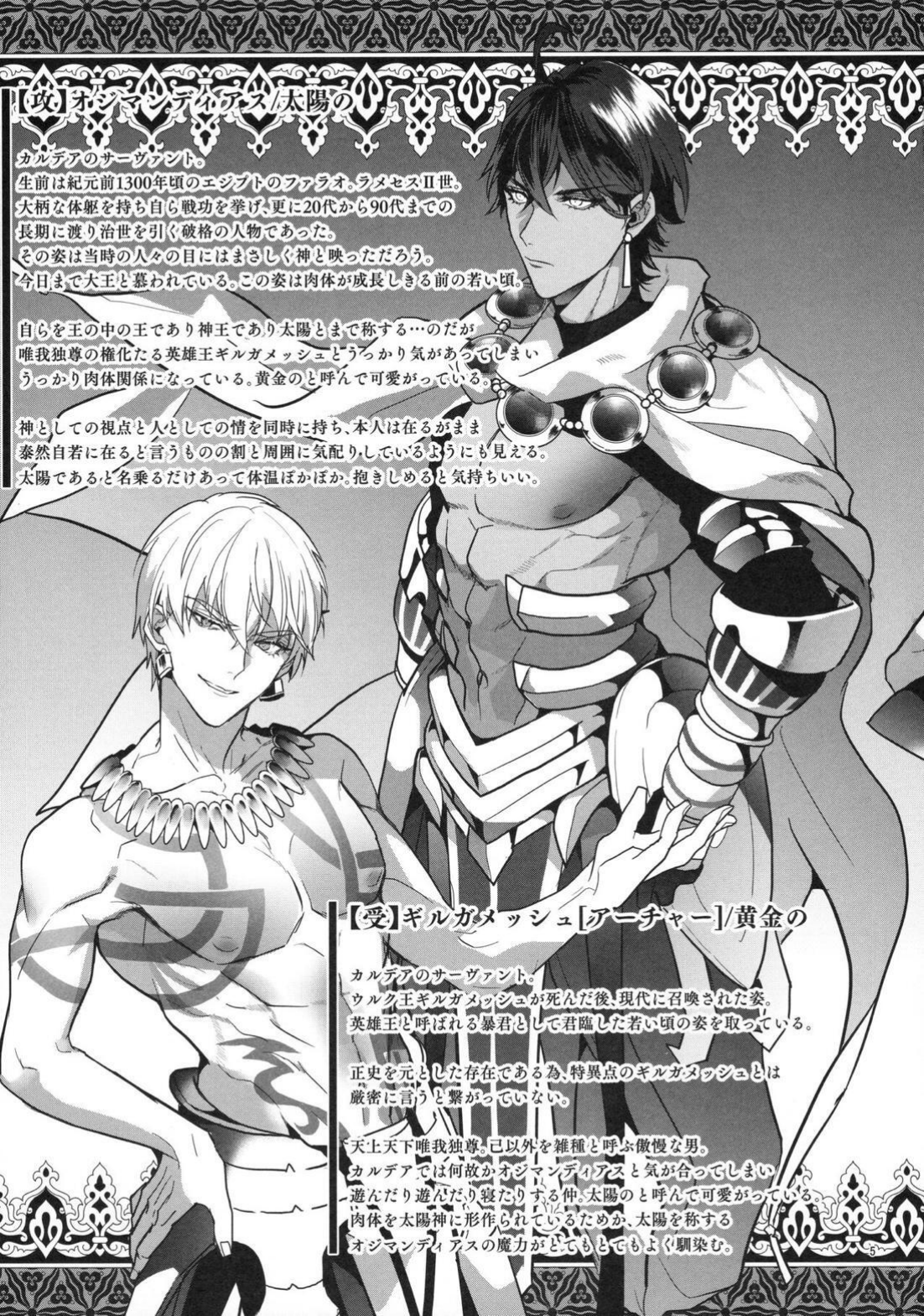
七つ目の特異点は紀元前2600年頃のメソポタミア。神代との境界の時代。神々の気配が色濃く残る地。三人の女神が強大な力の源である《聖杯》をめぐり争い、都市ウルクは今まさに滅ぼんとしていた。

【受】ギルガメッシュ

紀元前2600年頃のウルクに生きる王。推定百数十歳。
不死を求める旅をその目的から見れば失敗に終えた後、
暴君ぶりは鳴りを潜め賢王としてウルク復興に努める。

ウルク並びに人類が滅びる歴史となる特異点において
千里眼による未来視の力でそれを察知。
民に全てを打ち明けた後、来たる滅びに真っ向から挑んでいる。

人の王として神との決別を果たす立場だが、本人もまた神の混血。
国の運営と軍事、建築、その他もろもろの管理を一手に引き受け
その上英霊を7騎召喚し、市街には結界を張り、八面六臂の働きを
しながらの長期戦略。半神とはいえ疲労が募る。



【攻】オジマンディアス/太陽の

カルデアのサーヴァント。
生前は紀元前1300年頃のエジプトのファラオ。ラメセスⅡ世。
大柄な体躯を持ち自ら戦功を挙げ、更に20代から90代までの
長期に渡り治世を引く破格の人物であった。
その姿は当時の人々の目にはまさしく神と映っただろう。
今日まで大王と慕われている。この姿は肉体が成長しきる前の若い頃。

自らを王の中の王であり神王であり太陽とまで称する…のだが
唯我独尊の権化たる英雄王ギルガメッシュとうっかり気があってしまい
うっかり肉体関係になっている。黄金のと呼んで可愛がっている。

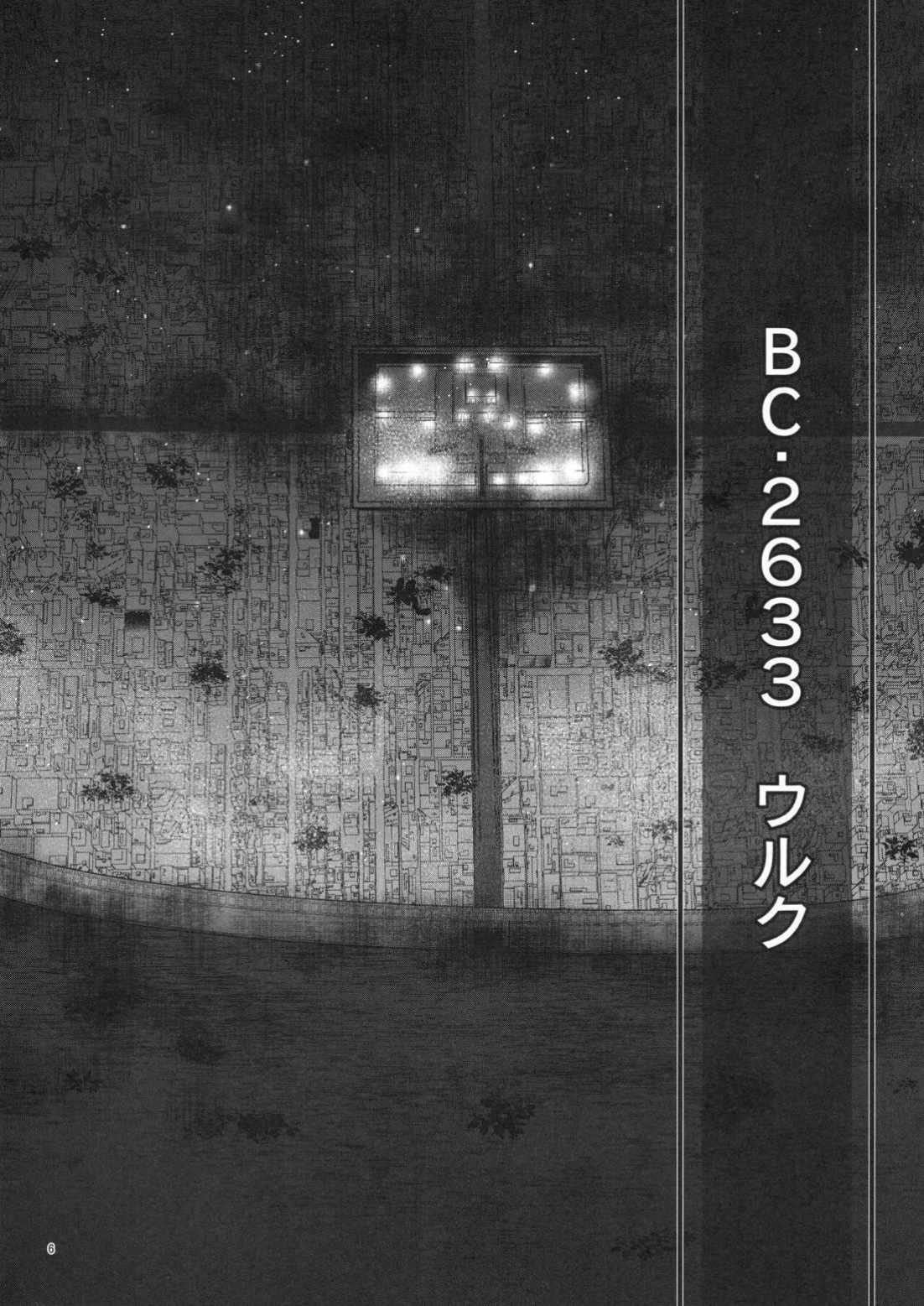
神としての視点と人としての情を同時に持ち、本人は在るがまま
泰然自若に在ると言うものの割と周囲に気配りしているようにも見える。
太陽であると名乗るだけあって体温ぽかぽか。抱きしめると気持ちいい。

【受】ギルガメッシュ[アーチャー]/黄金の

カルデアのサーヴァント。
ウルク王ギルガメッシュが死んだ後、現代に召喚された姿。
英雄王と呼ばれる暴君として君臨した若い頃の姿を取っている。

正史を元とした存在である為、特異点のギルガメッシュとは
厳密に言うと繋がっていない。

天上天下唯我独尊。己以外を雑種と呼ぶ傲慢な男。
カルデアでは何故かオジマンディアスと気が合ってしまい
遊んだり遊んだり寝たりする仲。太陽のと呼んで可愛がっている。
肉体を太陽神に形作られているためか、太陽を称する
オジマンディアスの魔力がとてもとてもよく馴染む。



BC・2633 ウルク

——辿り着いたか
カルデア

何だ
この抵抗は

空間に
分厚い膜が
張っておる様な

防衛魔術か
このままでは
弾き飛ばされ――

!?
マスター

逸(はぐ)れる

放っておけ
これで終わるのならば
その程度の人理だ

ほう…
ふ
さあどうだ

我がウルクは

親方
空から王様が

ざわ ざわ

…注目されておるようだが

王様…

王様だ…

民草の末端にまで我が尊顔は知れ渡っておるものでな

王さま
こんにちは〜

うむ
みなよく
働いておる

我がウルクな

本日午前七時を持ってカルデアは第七特異点へのレイシフトの準備を完了した

最後の特異点は
神代の末期
紀元前２６００年
古代メソポタミアの
土地だ
そこに行くだけで
これまで全ての特異点に
行く以上の難易度であり
現地で起こっている
脅威は更に
計り知れない
けれど自信を
持ってくれ
君達はこれまで六つの
特異点を解決して
きたんだから
更に心強い事に
今回同行してくれるのは

第六特異点で縁が結ばれ
呼び掛けに応えてくれたオジマンディアス王
そして古代メソポタミアウルクの王その人であるギルガメッシュ王だ
里帰りとは胸躍るのではないか？
黄金の
馬鹿を申すな太陽の
特異点と化したそれは「我のウルク」ではない

我が居るにも関わらず
滅ばんとする
人類なんぞ
何故手助けして
やらねばならんのだ
まあそう言わず
よろしく頼むよ…

などと
申しておったが
実際目にすれば
愛着も蘇るものか
太陽の
付いて参れ
ん？

王宮に
向かうぞ
雑種らめが
目指すのもそこだ
ああ
おーさま
鎧すげー
金ピカで
かっけー

我にウルクを
案内させるのだ
もっと喜べ

この地は
在りし日の
ギルガメッシュが
治めている

しかし
どこがとは言えぬが

余の知る此奴の
苛烈さと
治める国の様子には
少々の差異があるな

確かに奴の民は
強くあろう
そこに疑問はない
だが今ここに溢れる
街の活気は
ただ独り
絶対的な力を持つ
王の膝下というには
若干の違和感が――

ガシャ
ガチャッ
ガチャッ
ガチャッ
ガシャ
ざっ
ざっ

ざわっ
我の元となった存在そのものではないにしても
我の斯様な姿を見る事になるとはな
ほう？
生きながらにして己の亡霊と出会うとは奇異な体験をするものよ
民を鼓舞し滅びを待つ
我の我たる性質を捨てまでしてその程度しか望めぬか
もしや我
過労が祟って幻覚でも見始めたか？

毫碌したと断じる羽目にならねばよいが

ただの影であっても差し出口を挟まずに居られぬとは

よくまあ我の性質を写し取ったものだ

そこまで自虐か詰り合いかは知らぬが戯れておる時ではあるまい

見ればそちらも事情は理解している様子

我らの同行者が来るまでの滞在を許して頂きたい

必要とあらばその間元の目的とは別に手を貸しても構わぬ

ふむ
連れは少しは
話が出来……
……ん？

そういえば
何故貴様だけ
防壁を突破
しておるのだ

そちらの我が
他者を通せる
のであれば

カルデアの
者たちも
共に……

いや
……我と、
誤認するほど
混ざり合って
……おる？

影が愛人を連れて
本体に紹介に来た…？

父親の様に
対応した方が
良かったか…？

たわけ

ともあれ我は
余所者や
それに使役された
己に頼る気は無い

王宮を彷徨くのは
目を瞑ってやるから
同行者が来るまで
大人しくしておれ

特に貴様は余計な真似をするなよ

命令系統が狂っては敵わん

ふん

カルデアでは人類に不満を言い己を前にしてはそのあり方に異議を申し立てたな

さてどちらが焦点なのだ？

本気に見えたか？

我自身の選択なのだ

真実不満には思っておらん

そして見た所我が民は…

よく付いてきておるわ

一応は望める限りの状態であろう

…だが
サーヴァントたる
この我は

あの我が自ら封じた
ただ独り絶対的な力を持つ
英雄王の正にその部分だからな

それこそが我の我たる
所以と感じるのだから
腑に落ちぬ所もある

そして我は
我という歴史の中で
この我こそが最盛期で
ある事を知っている

そんな中で
老獪のやり口の
己を見たのだから
一言ぐらいは
口を挟みたくもなるさ

考えてもみろ

※九十代まで生きて
ファラオとして実権を握った。

貴様も九十になった
己が面前に立てば
何もかもが歯痒くは
感じぬか？

余はこの余が
最も心身充実しておると
知ると同時に
老いたる己が
経験と知識に
優る事も知っておるぞ

ふふ

それは我とて
知っておる

ちゅっ

ん

はぁ

先程のは
貴様の言うた通り
戯れておっただけだ

ならばよい
余にもあの者は
ようやっておる
様に見えた

さて大人しく
しておれなどと
曰っておったな

来い
落ち着ける
場所がある

幾らでも
仕事がある様には
見えるが仕方ないな

マスター達が来るまで
一時の憩いとするか

真面目だな
貴様

カチャ
カチャ
カチャ

何故此処に居る

我の寝室だからな

貴様の寝室ではない
少なくとも今この時点ではな

ほう
いつの間に此処は
この国の王のものではなくなったのだ

はあ…
今は話す気も
起きんわ

我は寝る
静かに
してお…

……何故
此処に居る？

そなたに
通された

通しとらん…

貴様ら
他人の寝床で
何をした……

だから
我の寝床だと
言うておるだろう

ドン

ええい!!
言葉の意図程度
解っておろうが

っと、と

ぽすっ

何のつもりだ

見るに耐えん程顔色が悪いぞ

疲労を軽んじては おらん

なればこそ夜明けまでの一時でも休もうと部屋に戻ったのだ

なぜっ

こら話を聞け

無論生身なら休息も必要だろう

だがどう見ても魔力も不足しておる

で？

回路を繋いで補給でもしてくれようというのか

正味それが目的であるのなら触れ合わずとも容易く叶おう

拒みはせぬぞ？存分に捧げよ

だが遊びに付き合ってやるつもりはない

無理に回路を繋がざるをえない未熟者か

くど

切迫した状況には品性下劣な軽口は好まれぬぞ

くど

元々その気のある時の方便に過ぎぬ

くど

このやり取りの間も身を預け回復に努めねばならぬ程か

余の知る体よりも痩せて血色が悪い

ちゅっ

むっ

さすっ

我と貴様は知らぬ仲だぞ

話がまとまるまで手を出さぬ分別はあるかと思ったが

うむ

当初はその予定であった

なでなで

だが見て分かり

抱き寄せれば更に明瞭に察してしまう

この衰弱を前にすれば

何やらせずには居られぬ気持ちになってくるな

おい太陽の
其奴はあくまで我だぞ
軟弱者として扱うのは止せ
我が自身で解決できる問題に
貴様も混ぜてやっておるだけなのだから弁えんか
また面倒な意地を…

ん
全く
どうでも良いわ
疾く寝かせろ
どちらも要ら…
…ぬと思ったが
先程から触れていて感じておったが良い魔力をしておるな
貴様には使い道がありそうだ
興味が出てきたか？
随分と馴染みが良いと好評だぞ

そうだな、暫し身を預ける

添い寝の栄誉をやろう

添い寝だけか

そこのたわけの様な事を言うな…

…

我が休まるよう上手く魔力を回せよ…

だそうだ

ふん

勝手にしろ

当人同士であるのに意見が合わぬな

其奴も憂さ晴らしが有用である事は理解しておる

だが今は真に一時しか眠らぬつもりであったな

…

トクン
トクン
トクン
トクン

……鼓動

眠ると脈が遅くなる
久方ぶりの感覚だ
すう
すう
サーヴァントにも心臓はあるが
生きた人間の様な生命維持のための機微は必要無いからな

すっ
トクン
トクン
すっ
トクン

……
今は

深く考えぬ
方が良いか

ん
…何だ？
我を腕に抱くだけで猛るのであれば聞き分けの良い顔などしなければ良かったのだ
起きてしまうぞ
起きん

ほんの一時で数日分の睡眠を賄おうとしておる

火急の用で駆け込んでくる者の気配でも無ければ戻らぬ様に

意識を深層に沈めこんでおるわ

……

ぺた

ぺた

とはいえ貴様は安眠の為に努めろと言い遺ったろう

無駄に身動いだりはするなよ

無茶を…っ

はあ…

無茶なのか？

左様な事はない

では続けて問題ないな

ん…

ふう…

ふ…

…っ

そなた

余が一人で身悶える様を見て何が愉しい

何だ？
では貴様は我の艶やかな顔を見て愉しくないのか？

……愉しいな

であろう

ぐぢ

ぐぢ

ぐぢ

ぐぢ

…ッ

ぶるっ

ぶるっ

ん、…

ふふ
くッ
ぐくんっ
ふぅ…
まあ我も今宵はこれで満足という事にしてやろう
次はそなたの淫靡な姿も見られる機会に頼みたいものだな

カルデアの
どうしても我の役に立ちたいと言うのであれば
下働きから始めるがいい
今の貴様らに手を貸す事も貸される事も無いと心得よ
祭祀長こやつらの待遇は一任する
かしこまりました

この家を使わせて貰えるんですか？
はい
ウルクでの拠点としてください
一軒家とは……！これはカルデア大使館ですね……！
お邪魔しま～…

遅いぞ貴様ら

無事辿り着いたか

王様！ファラオ!!

心配してたんですよ!!

貴様に心配されるとは舐められたものだ

モー!!

いや王様たちが居なくて私たち大丈夫かなって…

それはさぞ心細かったであろうな!!

王様たちはこっちの王様の手伝いをするんですか？

何を申す余らはカルデアの一員として同行して参ったのだぞ

カルデアに手を貸されるつもりは無い

即ち貴様らも我の策の内には入っておらん

という事だ

じゃあ一緒にお手伝い頑張りましょうね

下働きはせんが？

当たり前だたわけ

えー

我々も流石に王に手伝っていただく訳には…

私も肉体労働は遠慮するよ

マーリンは死んでください

ファラオは参加してもいいんじゃないですか？

監督はしてやる

早速何かあるのではないか？

はい最初の仕事は…

羊の毛刈りです

めぇ　ぇ　ぇ　ぇ…

毛刈り
農作業
建築

兵士訓練

漁

浮気調査…？

そうして浮気調査から謎の地下帝国に…

うむ…（ごくり）

ギルガメッシュ王こちらの報告に集中していただけますか

むっ!? 聞いておるわ!! 良い所で水を差しおって!!

西方のファラオよ 貴様一人か

おや 斯様な時間に玉座に居らぬとは珍しい

貴様こそ藤丸らと共に奔走しておる時分ではないか？

手分けをしておるものもあってな 余の割当は済ませてある

仕事は好調のようだな

良い町、良い民だ

共に在ると余にまで活力が湧く

そうであろう 我が民は強い

そなたが居てこそであろうがな

余はな
此処に参った時
若干の違和感を
覚えた
余の知る黄金のは
強き王だ
だがそれは
あれ個人の強さだ
個として
絶対の強さを持つ
王の下では
民の顔には畏怖がある
如何に民が
自立し優れていても
その判断、生命を
王に委ねて生きる
気配がある
しかし今の
この国の民は
統率され
団結しながらも
自らの判断で活動し
生きておる

民に寄り添い歩む…と言っても

結局は王とは孤高の存在であろうが

そなたの孤高の在り方は英雄王とは違うな

民を見れば王が理解る

そなたは民にとって好ましき王なのであろう

……

そういえば貴様初日以来我の元に来ぬな

カルデア大使館ではなくジグラット内の部屋を使っておるのだろう？

黄金のの言い分ではあるが

初日はそなたら同士の情事の添え物であっただけだぞ

黄金のとの関係からそなたに対してまで身を許せと迫る程無粋ではない

無論その気があるのであれば吝かではな――
駄目だ
うむ 極限の最中でのささやかな癒しを何とするかには個々人の嗜好があろう
ん？ そういった部分に関して我と貴様の知る我に特段差は無いぞ
だが暫く我らはジグラットに揃わんからな
それは…？

太陽の

そなたの腕の温もりは存外心地よかった

な

が

明日からは遠征に出てもらう

ささやかな癒しはその後としよう

いかんぞ
ああいった歳のとり方は良くない

この姿で顕現しておる余の精神と肉体はあくまで青年期なのだ
健全な若人を翻弄するでないわ！
胸躍ってしまったではないか!!

ふゆ
ふゆ

我に言われてもなあ

貴様も同様の事をするであろう

まとめて抗議しておるのだぞ

そこが堪らんだろう？

ドサッ

おっと

まあな、ううむ…

こういった心ときめく駆引きを体験するとは…

サーヴァントなどという立場とはいえ新たに生を受けるのも味わい深きものよ

戦時下に楽天的な発言だな

……何を申しておるのだ

己以外の全ての者が日常を過ごしながら戦せしめるよう取り計らっておる当人が

…

当人か どうかは ともかく…

形式的に 言ってみた だけだ

余も一応 言葉にしておくが

本気で色恋沙汰に 振り回されておる 訳ではないからな

分かっておるわ

しかし 駆引きとやらを 愉しんでおる 最中の相手と

気軽に寝れるとは 贅沢な話よな

ふむ、預けて おいた方が 有り難みが 増すであろうか…

こうしておれば顔は見えまい

ん…

顔を見ぬ程度で相手が我であるという意識を遮断できると

無理であろうな

あっ

はあ…

本来ならばそなたの様な者は二人と居ないのだから

すごっ
びくっ
ゾクゾク
はっ
ぐりっ
トロォ
んくっ
びくんっ
ててっ
うむ
やはり幾度味わっても褪せる事なき甘美なるそなたの肉体であるわ
ぬぷっ
あ
当然の、ことだ…っ
ハ…ッ
ぬぷっ
ぬぷっ
ぐぐ

ぐち
ぐち
ぢゅぽ
あ
あ
ぱぁぱぁ
んあっ、う
熱…ッ
ぐち
ぐち
ぐち
ふっ
あ
あ、あ
ぱぁぱぁ
んっ
んっ
あふ
ぢゅぽ
あ
あ
あ
ぢゅぽ
ぢゅぽ
はあ…ッ
やはり
悦い
あやつも
はじめから、
受け入れて
おれば良い
ものを…っ
ぢゅぽ
ぢゅぽ
はっ
はっ

休む事なかれと、己に課さざるをえぬとはいえっ
はァ、一度長期戦を覚悟したのなら…っ
使命果たさぬまま、半端に命尽きるなど最も無様な失態だ
そなたの目から見て保たぬか？
今の、ままではな…ッ
あっ
己一人で耐えようという道を避けてはおるが
カルデアが来て選択肢が広がってしまったが故にの負担もあろう
ふむ…

はっ
ひとつ、んっ避け得ぬ結末が我には見えておる
だが…ッ
その後の展開は
我らの存在を、因子と、はぁっ…して揺蕩うて、おるのだ
はっあ
あっはっ
まずはそこまで
全ての力を結集…っし、てたえねばならん
はあっんあっ
あっ…
なぜならそこにこそきぼう
が…っ

っぐ、おい
いまは、たえんでよいのだぞ
ぐちゅ
ぐちゅ
当然だが…何だ？
ここで果てるには足りぬと申すのか？
ぐちゅ
加減、しておろうが
そうせんとそなたの会話にならんだろう
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

はあ
あ
ふっ
はあ
ぜぇっ
ぜぇっ
ん
ぜぇっ
ぜぇっ
ぁ
あぁっ♥
ぅッ
ぐ…っ
ぶくぶくっ
ん
びくっ
ドクン
はあ
はー
はー
はー
ふぅ
はあ…
ぴくっ
は
…やはり
貴様の精は
良い刺激に
なるわ…
んっ
ずる
ドプ
♡♡

我らがマスターも功績を認められ

ようやっと雑用からも解放のようだ

明日からは調査に駆り出される

我はウルには行かん

何か懸念が？

長期の滞在で雑種の体力が心もとない

我は単独行動を使いこちらの様子を見ておこう

省エネでな

そうか…

継戦に最適な環境を整えても消耗が進むのは必定であるからな

うむ

先刻の話の通り
全力で走り続ける事は
生者には無理だ

我であってもそれは
「尋常でなく長く続けられる」
という状態に過ぎず
必ず限界がある

マスターが
一時倒れでもしたら
その間余とそなた、
マシュが無力化する

決戦がどこに
来るか分からぬ以上
際の際を攻める事も
出来ぬ故

余裕を持たせるに
越した事はないか…

余らでは
平時の活動で
凡英霊の
戦闘状態並の
魔力を使うて
しまうからな

節約
してやるか

もふ
もふ
スリ♥

そういう事だ

——と、いうことで
ウルの民は一旦
町に留まる事となった
あの獣？の如き
女人も見た目は
怪奇極まりないが
力は神と
名乗るだけの
ことはある
ふはははははは!!
貴様真面目な顔をして
面白生物を語るでない!!
余計に
愉快ではないか!!
——その後
イシュタル女神は
空からはたき落とされ捕縛
マスターの温情にて
解放される運びとなった
おのれあの駄目神め、ふふ
ウルク都市神の矜持も
見せられぬとは情けない奴
くく、ふはははははは!!
嬉しそう
ではないか
うむ
いい気味よな!!

——そして
ニップル市では
そこはよい
今は気分良く
飲んでおるのだ

うむ
だが酒の肴としてはともかく
戦略の上では避けては通れん
当然だ
明日の軍議で女神同盟を切り崩す算段となろう
女神同盟…
まずはあのかしましい娘からだな
そなた確か求婚されたのだったか
色仕掛けでひょいと引き入れられんのか？
やめろその話も酒が不味くなる
そう邪険にせずともよいではないか
あの魂の輝きは正に女神の美しさだ
つふつふハハハ
一度ぐらいは寝た事があるのだろう？
悍ましい事を申すな
黄金を積まれてもごめんだ

あやつの話はよいわ
何はともあれシュメル全土を堪能しておる様だ
余ばかりが土産話をしてしもうたか
そなたは……
そなたはもう一方の並に顔色が悪い
食事では賄いきれておらんのか？
少し余の割当魔力を渡してもよいぞ
何のために役割を分けたと思うておる
それは本末転倒と言うのだぞ
スリ
スリ

……やれやれ
左様に献身的な姿を見る事になるとは思うておらなんだ
ふん

勇者藤丸よ
猛獣イシュタルを見事手懐けて参れ!!
勇者の仕事がついにきた…!

我はどうする

お前は魔獣戦線に赴き防壁修復の指揮に当れ

前線兵士の編成の見直しもしてこい

英雄級の将軍共が居らずとも成立するようにだ

レオニダスも牛若丸も居らぬ今でもこれまでと同様…

いやそれ以上のパフォーマンスを発揮させねばならん

全く…我がもう一人居て助かったと言わざるをえんな

構わんが我自身は前線の戦闘には加わらぬぞ

雑種との回路を断っておる

見れば分かる

他にも仕事がある故戦線の立て直しを終えたら戻って来い

王様が二人居る…

心強さと不安が倍増…

恐い

これで…何とかなるんだ！

神々しいな～

しぼーん…ゲッ…

パチッ

……戻ったか

玉座で寝るな

運ばれておる姿なぞ臣下達には見せられん

己で立って部屋まで行け

パチッ

魔獣戦線はどうなった？

壁は建て直し編成も見直した

練兵も十分だろうゴルゴーンめとの戦いまでは保つ

お前も我の目で見ておったろう

おっと
ぐらっ
ぽてっ
誰も居らぬから良いものを
士気に響くぞ
故に誰も居らぬ中でやったのだ
むにゅ
むにゅ
全く…身を窶しおって
己の健気さに涙が出るわ
そうであろうな
物理的に離れてマスターからの魔力供給を断った上で
更に自己の形を保てる極限まで我に魔力を分け与えておるのだから
「拒みはせぬ」と言った手前黙って受け取っておったが
まさかかつての我がこうも健気に振る舞えるとは
この歳にして新たな自分とやらを発見してしまったな

…太陽のは戻っておらんのか？

イシュタルを引き入れた時に一度戻った

すぐにエリドゥへ向かったが

あれも魔力を喰っておったな

分前を奪う算段であったか

いやお前が直接受け取っておけ

疲労回復にあの魔力は良いぞ

更には頭痛、肩こり神経痛、冷え性、切り傷その他概ね何でも効く

あやつは温泉なのか…？

うむ

だがカルデアの魔力はお前から随分と横流しされたからな

ふむ

気になるのではあれば一旦我からは切っておくか

そこまでせんでも…

よいか お前は今眠ればそのまま冥界にでも落ちそうな様子をしておる

ぴしっ

ふはははは!! 然もあろう!!

とはいえこの程度で実際に落ちる訳ではないのだから

限界の限界は我にも判るわ!!

さしもの我でも笑い事ではないわ

食事と眠りと魔力を摂れ

その際に我を経由したものも良いが

丁度気分転換になる奴が居るのだから活用してみろと言う話だ

分かった 分かった

太陽のなら我と同じ方式で譲渡できる

体力が足りぬならそう伝えれば悪いようにはせんだろうさ

そうだな

ワーオ！
メチャクチャに壊したはずの城門が直ってマース！
フハハハ!!
余も建築監督に当たった故当然よ!!
無論ウルクの民らが仕事熱心である事は疑いようもないがな
そうそうウルクの永久素行問題児は金ピカだけってね!!
む？それは——
あれっ!?
通りに誰も歩いてない…
シーン

交換所も閉鎖…？
ウルクとは思えない重苦しい空気…
いったい何が…？

シドゥリさーん…？
ただいま戻りました…
…！
皆さん
お帰りに…
けれど
けれどもう遅いのです…!!
遅い？
何があったんですか？
落ち着いてください
ギルガメッシュ王が
ギルガメッシュ王が…!!

お隠れになってしまったのですから…!!

いや…どうやったらこの王様殺せるんですか…?

彼は戦場での死を避けるため指示に徹すると決めたんだぞ!!
暗殺対策だってしていたじゃないか!!
黄金のはどうした?! 此方に残っておっただろう!!
そちらのギルガメッシュ王は我らが王の御用命で各地を飛び回っていらっしゃいます

そして死因は暗殺ではありません…
昨夜激務の末に一瞬報告が途絶え私が場を外した間にこの玉座でうたた寝をされたようで…

どうやらそのまま冥界に…
それはつまり…過労死…?
いやありえないよね!? 過労死で死ぬなら今まで何度だって死んでるでしょ!?
そもそもウルクの様子も活気が無さ過ぎたし
そういえばウルクで衰弱死が多発——
もしかして何か他に
王様を他殺できるのなんて女神同盟ぐらい

つまり まとめると 冥界の神 エレシュキガルが 弱った者から 魂を抜き取っていた

そして 肉体さえあれば 冥界から魂を 連れ戻せる という事だな

なら今すぐ 冥界に向かおう!!

あなたたち本当に 怖い物知らずね

冥界よ 冥界!?

でもそうする しかないなら やるだけだよ

純粋な目には弱いのよ

ぐぬ…

だって私は女神だから

女神だから…

…まあ 仕方がないか

案内できるのも 私だけって 感じなのかしら

戦力は全然 足りないけど… 何とかするしか ないわね

戦力? 余も 同行するぞ?

それは止めて おいた方が良いわ

冥界では神性が マイナスに働くもの

「生きている人間」
立香とマシュに任せるしかないのよ
こくこく

行ってきまーす
ひゅーん

メソポタミアの冥界が如何程の深さかは識らぬが
そろそろ奥に行き着いた頃合いであろうか…
待つしかないというのはいやに気を揉むな

美しい死体だ
眠っている様にじか見えぬな
黄金のも糸も即座に国政を執る事は可能であろう
特に黄金のは若い時分の性質とはいえ通常なら決して望めぬ程に最適な代行だ
だが…
それでも、どうしても、生きぬ者は歴史を動かす当事者には成り得ぬ

ウルクを…
人理を救うのは
そなたでなければならん

今戻らねば水の泡だぞ

ウルクの王よ

…死体を愛でる趣味でもあるのか？

それとも死の眠りを覚ます王子気取りか？

ならばよいタイミングであったな

…マスターらは事を成した様だ

うむ

あやつらは物理的に戻らねばならぬ故時間がかか――……む

硬直しておる

まあ死んでおったからな

血が通うまで安静にしておれ

……

…身体が冷たくて堪らん

余が助けに？

今吹き込まれた魔力はなかなか温かったな

ふむ

ちゅっ

ぺろっ
ん
ぱくり
ちゅ
……
んっ
レロ…

……
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ
あ…
……
…見えるに
血が通い
始めたな

うむ重畳
この調子で末端まで温めてやろう
あ
うん？
どうした
何か気に入らぬか？
ん
んん…
ゾク
ゾク
ゾク

太陽の…
分かっておるのだろう？
あまり焦らすな…
…うむ
なで
なで

余の知る
黄金のと同じ
身体なのであろうが

どうも
気恥ずかしさの様な
ものは感じるな

いや…
これは英霊の此奴を
知るからこそ
反応の差異が新鮮で
生じる感覚か

そして
正直な所

生きたその身に、
余を刻み込むという
概念に高揚しておる

これは、そう
愉悦――

む…

待て待て
今の流れなら口での奉仕ではないか？
何…!?
この状況で余には耐えろと…
っ、いやそうか
負担がかかり過ぎるのならば仕方がないな
いや今のは気にするな問題ない
そこまでは言うておらん
経験の無い展開であった故少々戸惑っただけだ
経験のない？
ああ確かに余が勝手知ったる身ではないのだったつい黄金のと同じ様に…これは失礼した
うむ
何せこの身に男を受け入れた事はないのでな
丁重に扱え
……
……
……は？

なん……
うん？
何だ聞いた事がなかったのか？

我は男女問わず華奢な者が好みだからな
貴様の様な肉体の完成した男を床に上げた事はない
無論抱きこそすれ抱かれはせんわ
そ…
つまり当然召喚された直後の若い我に経験はない
一応この余はまだ成長期であるが

そういった事はあちらのそなたも言うべきであったろう…
如何様にも丁寧にしてやりようがあったぞ…
我に言われてもなあ
何を凹んでおる

慣れ切った顔をしておったくせに……
我とて驚かなければそうしておった

ぽふっ

ん

まさか
臆したか？

喜ぶ所だぞ

驚愕で
勢いが削がれた
だけだ…

ぎゅっ

では
止めにするか

そろそろ
身体も
動き出した

それでは
そなたの気が
済むまいと
言いたくなるが

流石に余が
この場で強気に
出る訳にいかぬ

訪ねたくあろうから
先に此方の気は
済まぬ事は
伝えておこう

ここで私欲に
走らぬ程度には
自己を律せる故

考慮に入れんで
よいがな

貴様…

なぜ
むぎゅ
ぎゅ
フフ
小狡い言い回しも出来るではないか
ふむ…
……
……全く
我の気も済まぬわ
あまり焦らすなと二度も言わせる気か
おっと
ぐいっ

ぐっ
ぐっ
ぢゅる
あっ
は…あッ
びくんっ
これが希望であったろう
んっ…
それが予想であったのだ
ぢゅっ
ぢゅっ
んっ

ん…
ん…
ん…
ん
んっ
じゅるぐ
ぴくッ
ぴくッ
ぷぷ
ぷぷ
んっ
ぅっ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ん…ッ
ぐ、…っっ
ぶるぶる
ぶるぶる
どくどく
どくどく
ぷぷ

はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ふむ
堪らぬな

そなたはどの様な心地だ？

我の肉体をよく知っておる動きではないか

だが少々苦しいぞ

ぐぐっ

ぐぐっ

ふむ…すまぬが油を出して貰えぬか

ああ…普段はそうしておるのだな

ト○…

ビクッ

んっ!?

うぉ

うぉっ

な…成程な

うむ…成程……

相当に改善したと見た

…

貴様が愛撫されておるわけでもなしに随分と限界そうではないか

……余はずっと待たされておるものでな

…我に這入りたいか？

む…うむ

此度こそは耐えろとは言うまいな

言わぬさもうよいぞ

今度は性急であるなもう少し慣らした方が

喜べとは言ったが生娘の如く扱えとは言うておらん

ぐいっ

ぐいっ

く、こら…

ぐぐぐ…
くっう……ぁ
ん…
ゾクゾクッ
は
は
はあ
ぐぐっ
ぐぐっ
はあ
はあ
……奥まで行ったぞ
言われんでも分かっておる
いちいち強がるな
そなたが初めて受け入れておる事実は変わらん

強がってはおらん
実際我としても
存外にすんなり
順応しておる

それ自体は
喜ばしいがな

ほら敷いておけ

む…

既に
かなり…

魔力がじわりと
広がる感覚が…
ふむ…

動いても
問題は
無さそうか？

何を遠慮
しておるのだ

貴様の吐精が
俄然楽しみに
なってきたわ

楽しませるのは
そこばかりでは
ないぞ

余に与えられる
律動だけで
そなたは快楽に溺れ

人生の記憶に残る
一夜となるのだから

ぐっ

ぐっ

ズッ

ブッ

大口を――

んっ!?

おいッ いきな――
あッ

ぬちっ
ぐちっ
ぬちっ
ぐちっ
ぬちっ
ぐちっ

あ
あ
あ♥

ぐちっ
ぬちっ
ぬちっ

うぐ
く…ッ
おの、れ

そなたの好き所は
把握しておるとはいえ
初めからそうも激しく
反応されるとな…
その状態の身には
刺激が強かったか

おのれ馬鹿にしおって…

ぐぬぬ…

何という事はないわ

好きに突いて来い

こらこら

そうは言ってもこの顔だからな

程々に優しくしてやるか

まあ余もゆるりと愉しみたいのだ

言われた通り好きにやらせてもらおう

ちゅ♡

むう…

はっ

ぬぢ

ぬぢ

ぬぢ

はー

はっ

ん…
ぐぷっ
ぐぷっ
ぐぷっ
ぐぷっ
ぐぷっ
ぐぷっ
ぐぷっ
ぐぷっ
ぐぷっ
ぬぷ
ぬぷ
ぬぷ

ぐちゅ
ぐちゅ
んっ
んっ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
ふっ
んぅっ
んッ
スパ
スパ
スパ
スパ
んく
んぅ
ん…
ふぅ…
中々可愛らしい真似をするではないか
だが余にとっては今更の事だ
放埒に声を上げて良いのだぞ
スパ
スパ

…っ
あ…っ
ビクッ
ぐいっ
ぐぷっ
ぐぷっ
ぐぷ

嗜虐心と征服欲が
目的のそなたと
同じとは人聞きが悪い

余は心安く蕩けるよう
計らってやるつもりで
居るのだから

ふん
そう言うだけで
気は、効かん

はぁ、

ふ

は

は

恥じらう相手を
前にして…っ

あっ

燭台のっ火も、
吹き消して、やらぬ、
性質の、やからか？

はぁ、

くりっ

!!

んっ…

ちゅむっ
んっ
ぐちゅ
やさ、
ん
んっ
ぐちゅ
ぐちゅ
やさ、
んく
んん…
む
ぬぷ
ぬぷ
ぐち
ぐち
ぬぷ
ぬぷ
ぬぷ
んっ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぬぷ
ぬぷ
ぬぷ

ぢゅぷ ぢゅぷ
……
ゾクッ
……ん、ぅ
ビク
ビク
ぢゅぷ ぢゅぷ
ふっ
……ッッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ぢゅぷ
ぢゅぷ
ぷはっ
ふぁっ
は
はぁ
はぁっ
はあ…

……
感想を求めるな
余は何も言うておらん
顔が言うておる
…あやつの言い分もあながち間違いではなかったな
疲労回復健康増進打ち身火傷に高血圧
その他諸々…効くとか何とか
えへへっ
無論余の光輝には汎ゆる効能があるとも
乗るなたわけ突っ込む所だ
冗談はともあれ口酸っぱく薦めるだけのことはあった
今は穏やかに身中を巡る血と魔力の熱を感じる
このままであれば恙無く回復しよう

よく休め
ほんの僅かでも心地よき休息は大いなる助けとなるものだ
ずる…
ビクッ
あっ…ふ
また血が湧くかと思うた…
ハハハ
こんな時でなければ明け方まで愛でてやる所だが
はぁ
はぁ
ゾク
ゾク
さていつまでも死者の寝床に横たわっておるものではない
そなたに相応しき場所に戻るぞ
しかし
まさか最期に肌を重ねる相手が異邦からの男になるとはな

最期とは また弱気な
余らもそなたも 人類が生き延びる事を 信じ戦っておるのだ
…それは そうだ
やれやれ 斯様な姿を見れば
兵に示しがつかぬと 若い我が憤ろうな
様子見にと 敢えて残り おったのに
むざむざそなたを 死なせたあやつこそ けしからん
こら貴様が あれを責めれば 即ちそれは 我への批判だぞ
難しい事を 言うな
そも我に意見 しようというのが 心得違いなのだ
よく 眠っておる

太陽たる余は暫し身を隠し
後は夜闇にそなたを預けよう
ギルガメッシュ
そなたの眠りに祝福があらん事を

黄金の戻っておったのか
今しがたな
申し開きは？
我を責めるな
まさかほんの一瞬魔力供給を断った隙に己が過労死するとは
見えていたのではないのか？
見えても信じられるか？
取るに足らぬ未来…
可能性としては見えたが故に休めと言っておったのだが
可能性だけの存在にすぎぬと判じるわ
ではその目は今は何を見据えておるのだ

……

滅びるウルク

ティアマトと名乗るゴルゴーンが倒せぬと？

女神同盟も瓦解し余としてはそこまで悲観はしておらんが

……

……

まあ…

この地の原初の神が他地域の一女神に上塗りされた状態で召喚されておるのが

真実とも思えぬとは…感じておるさ

しかし未来が視えるといっても

思わせぶりで要領を得ぬばかりではな

どうしても必要な場合には明確に伝えておるわ

我は預言者ではなく王だぞ

自己の判断で先導する者であって

啓示によって煽動する者ではない

この目に何が映ろうと

それを使うのは我一人だ

ぽろり

ぽろり

なんだ？

暫し夜風にあたっていたのなら

余の身は温かろう

…そうだな？

近頃の貴様の感覚からすれば これは紛い物の温もりなのではないか？
…そういえば
直接そなたに生への感動を伝えてはおらんと記憶しておるが…
あちらの我への言動を見ておれば判るさ
この温もりが生体機能でないのなら
これは余の魂が持つ熱だ
ならばそれに触れるのは尊き事であろう

物は言いようだな
もしや比較されたと思うておったか？
どちらも我なのだ
貴様がどう捉えようと取るに足らぬわ
…さて町に降りるぞ
何用だ？
またしても王が冥界下りを成し遂げたのだ
急ぎ詩人共に詩を作らせてやらねば
ああ成程職人達も絵や像の題材としたかろう
問題はない全ての我は同時にその光景を観るからな
しかし語ろうにもそなたが行った訳ではあるまい
……改めて明言されると考えさせられるな
何か反省すべき点があったか？
いや…左様な事はないが…

タンッ
見よ
今宵のウルクも灯が絶えぬ
怠惰と飽食の脂に灯した火ではない
生命の息吹そのものの輝きだ
気付いておるか
そなたが国を見下ろす瞳にはいつでも愛の光が宿る

確かに余は
そなたらの性質を比較し

王としての
在り方が別だと言った

だが国を語り人を想う
その根底に歪は無く

清廉に峻厳に
世界を慈しむ姿に差異は無い

ギルガメッシュよ
その手中に世界があると自負しながら
自らの目前でそれが零れ落ちていく様を
如何なる想いで背負うのだ
如何なる想いで己が国の滅ぶ様を視続ける
余とて我が国が滅んだ事を知っておる
命ある時ですらいつしか滅ぶ事も理解っておった
だがそれは余に死すべき定めがあったからだ
余以外に真なるファラオは存在しえぬ

けれどギルガメッシュよ
そなたは……

自身を
最良の存在と信じ
生ある身で
采配を振るい
絶対的な自己への
信頼を持ちながら

それでも尚
その手で守れず
滅びる国を
視るのか

ぷはっ

なんだなんだ

唐突(とうとつ)に

どうした

黄金の

余は実に

新鮮(しんせん)な心持(こころも)ちだ

この余が

他(た)に比類(ひるい)ない

ファラオたる者が

まさか

共感(きょうかん)によって心揺(こころゆ)さぶられる事があるとは

共感……

……？

くっ

はは

それはもしや

我(オレ)にか？

勘違いも
そこまで行くと
清々しいな

共に
消えましょう
ゴルゴーン

それが私が
この世界に呼ばれた
理由なのですから

ドン

何だ
これは
ギャーッ
ギャーッ
市民はジグラット内に避難させよ
これは本隊の侵攻ではない!!一時交戦すれば退散する!!
編成を乱さず持ち場を守れ!!

ええい
悍ましい
次から次へと
湧いて出よる!!
黄金の
いったい
何が——
遂に来た
我が瞳に
映らぬ未来
これこそが
人理終焉の分岐点

人理を食らう抑止の獣
原罪の獣ティアマトの顕現である

バビロニア紀行　古代の王たち　前編　終

次回
バビロニア紀行 古代の王たち
後編
うむ！
「王様が居なくなって
私達大丈夫かな…」と
さぞ心細かったであろう!!
王様〜!!

あとがき

やっっっっと描けました……。七章をテーマにしたオジギル本はずっと描きたいと思っていました。しかし七章の良さは、本来ならば悲壮感の漂うであろう絶体絶命の中ギルガメッシュというリーダーシップによって日常を失わず、希望を失わずにいられるという所です。そこに強烈な王（というか本人）が増えたら台無しだよという気持ちがあり、構想を始める前の段階では難しそうだと尻込みをしていました。ただ、いざソポタミアの地に行った王様達の事を考え初めたら、結局あの状況で有能な人物が二人増えても決定的な打開策にはならないと感じた事とあくまでサーヴァントはカルデア側であって国を率いるリーダーシップを発揮できるのは術ギル様だけなのだなと感じた事から、最終的にはさほど違和感を覚えずに描く事ができました。
といっても七章ストーリー部分はダイジェスト進行をしつつあくまで王様たちがどう過ごしていたかを描いたので、難しい事はぼやっとした感じにできたからこそ成立した気もします。

まあ結局の所カップリング本なので話の趣旨はオジギルがいちゃいちゃする事なんです…！　この状況の中でどうしたら「そんな事やってる場合じゃないだろ」を回避しつつエロに入れるかなんです……!!
術ギル様自身が政策として、長期の戦争を日常生活を止めずにこなしていく方針にしていたのでセックス自体は食事や睡眠と同じように行われて良いとは思ったのですが、その中で術ギル様本人は寝食を犠牲に過労死するまで働いているという事実…。結果的に可能性として過労死が視えている弓ギル様が自分自身も長期持ちこたえるスタイルにしろと言い続ける事になってしまいました。寝て食べて日常生活を送れと言ってるんです。
弓ギル様は自分が気に入ってるのに他の自分が体験していない事があるとか耐えられないと思うんですよね。というかそれぐらいの気持ちになる相手じゃないと何度も自分を抱かせたりしないです。寝食セックス健やかな日常生活を送れ、その上で美味い物を持ってきたのだから勿体ぶらず早く食えです。

今回術ギル様が男を受け入れるのを初めてと言った所は、描いた私が一番ほんまか???という気持ちになっています。悦楽を極めていると豪語するのなら受け役もやっているのではないかという疑念は尽きませんが、そんな事を言い始めると興味を惹かれない特殊プレイでも何でもかんでもやっているのかという話になってくるので、とりあえずこの世界線のギルガメッシュは成人男性に興味は無かったという事です。好みの可愛い男の子女の子に後ろの開発をさせてた可能性は捨てきれな…いやまあ深く考えるのはやめよう。
術ギル様がオジマンディアスを誘っていたのは、弓ギル様が同じ城内で抱かれている所が視えていたので割と自分にとってもそういうのが普通な気分になっていました。まんまとすりこまれてますね。

ちなみにこの《視えている》という概念に対しての私の理解についてなんですが、ギルガメッシュは《千里眼》と《全知なるや全能の星》を持っているということから現在未来並行世界ほぼ全ての事が視えているんですね。ただ視えていると意図的に見ているは違うもので、例えば我々が道を歩く時に木の葉の一枚一枚、砂の一粒一粒は確かに視界には入っているけれどそれら全てを意識する事はありません。それのめちゃくちゃ規模の大きくなったものなのではないかと思っています。
型月世界的には多くの並行世界は剪定事象として消滅するものなので、ギルガメッシュは自分が負けるような世界線は見えてもありえん（可能性としてしか存在しない）と一蹴するらしいのですが、ギルガメッシュにとって多くの事柄は視えていても仕方のないものであり、意識しないよう脳が処理するものなのではないでしょうか。

呼び方について、今回オジマンディアスから術ギル様に対してはギルガメッシュで一貫しています。魔術師であるという特徴はこの時点で有しているものの、その特徴だけを抜き出した定点としての存在のサーヴァントではなく生前の本体ギルガメッシュだからです。
術ギル様が気安く太陽のと呼ぶ前に西方のファラオ呼びした所もお気に入りです。紀元前 2633 年は丁度第 3 王朝末期、数代後にはかのクフ王がピラミッドを造る頃ですね。改めて何でそんな時期の記録が残ってるんだ？西方のファラオという概念はギルガメッシュにとって未来知識ではなく現実のものとして存在してるんだなと思うとなんだかドキドキします。ちなみにオジマンディアスは第19王朝のファラオです。歴史を感じる…。

次ページに設定資料を載せつつ続きます。

衣装設定

珍しく最初に衣装設定画を用意してから描いたらとても楽でした。
夜のオジマンディアスが術ギル様相手の時と弓ギル様相手の時で上着が変わっているのは
最初のは術ギル様にかけたままにしたからです。とはいえ衣装を自前霊基で持っているわけではないので
別のを拝借していきました。オジマンディアスの服はだいたいどちらかのギルガメッシュのものです。

アクセサリー

素材化していたピアスの一覧。
オジマンディアスのものが
細長い傾向でギルガメッシュ
のものが大ぶりチャームです。
術ギル様が服やピアスに八枚
花弁の花を使っているのは、
ウルクの都市神イシュタルの
象徴である所からでした。

一緒に寝てるので
毎朝服とアクセサリー決めから
始まっている。王様が華美なのは
仕事の一環ですよ。

余様も普通にジグラット内の人間に
身の回りの世話をさせてる。
術ギル様が部屋に戻ってきた時に
着替えの手伝いをさせていたシーン
みたいな感じ。王様っぽくて好きです。

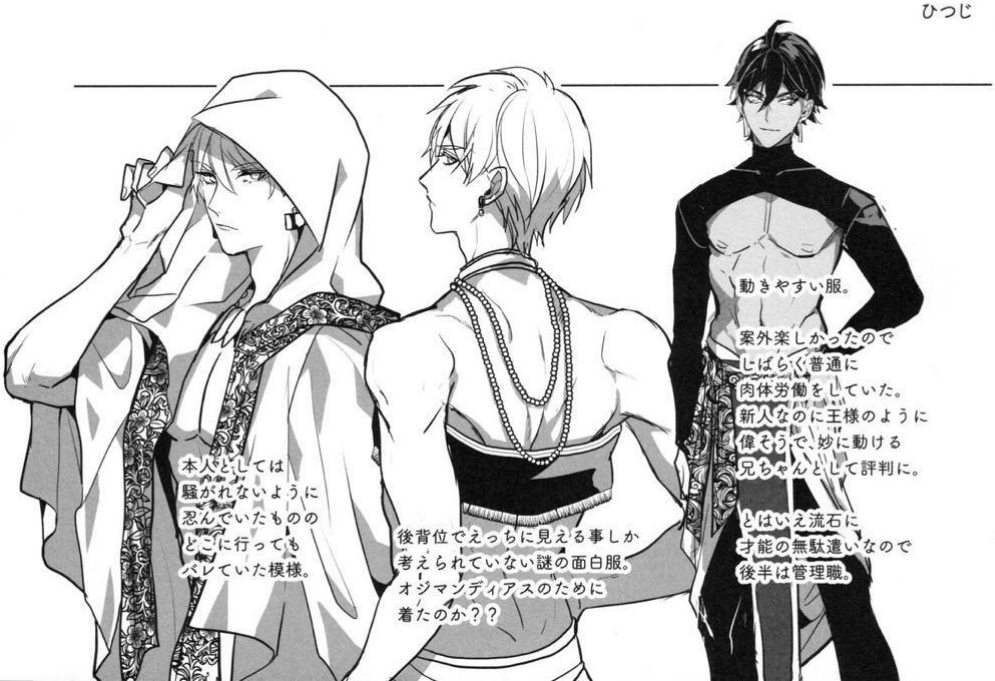
二回目をやったことで今後も酒蔵のオジマンディアス泣きがち問題が出てきそうな予感がしつつ、実際オジマンディアスは感情の盛り上がりで涙を流しそうな雰囲気があるんですよね（個人の感想です）。オジマンディアスは自分の在り方を神として、人間には及ばぬ泰然自若さを持っているというような言動をしますが、普通に感情的で愛情深い所を隠そうともしていないです。あえて超然的な様子であろうと努力しなければいけないのは真なる超越者ではなく、あるがままに振る舞う事こそが神としての在り方なのでしょう。と言いつつ努力的側面も見えるんだよなとは思っていますが…。

オジマンディアスはギルガメッシュに同情しているのではなく、本人も言っているように共感しています。
実際にはギルガメッシュは国が滅びても人が滅びなければ良いのでそこを目指して頑張っているわけですが、それを理解していても尚、オジマンディアスは《自分が今治めている国》への深い愛情を知っています。治める方法、向き合う姿勢が違っても、英雄王と賢王がその根本で同じ人類愛や愛国心を持つのだろうと考えているようにギルガメッシュと自分もまた王者の資質ある者として同じ様な自国愛を持っているのだろうと感じたのです。そしてもし自分が、自分の統治している時代に目の前で崩壊する自国を見たのであれば――それは辛い事でしょう。

『バビロニア紀行』は当初仮タイトルとしてフォルダにつけていた名前だったのですが、アニメでギルガメッシュ紀行とかいうタイトルが来たので…思わず本タイトルにしました…。アニメで動くギル様最高でしたね…。立ち絵だけでは想定していなかった感情を見せてくれたシーンも沢山あって、本当に尊大でおちゃめでカリスマのある王様でした。顔は可愛かった。ブルーレイで余韻も咀嚼しつつ後編にも描きたいシーンがいっぱいあって作業が楽しみです。しかしこの数ヶ月締め切りが無いと本当に完成しない事を知ったので、気長に構えつつも自分に打ち勝ちたいです。今回作画の時間を普段の倍かけたので作業としてはめちゃくちゃ丁寧なんですが、実際の出来にも反映されているといいな…＾▽＾

お手にとって下さった皆さんに楽しんでいただけていたら、そして後編を楽しみにしていただけたら幸いです！
（相変わらず厚い本になる予定なのでもしかしたら軽い本や再録なんかを間に挟むかもしれません）
よろしければご感想も頂けると嬉しいです！　お読みいただきありがとうございました！

ひつじ



バビロニア紀行
古代の王たち

発行者　ひつじ/酒蔵

連絡先　ancococo@baa.daa.jp

発行日　2020年7月

印刷所　株式会社 ブロス

SpecialThanks♥
デザイナーのMさん

感想お待ちしてます！一言から大作から箇条書きから小説から
途中まで書いて力尽きたやつまで何でも送ってください@(・x・)@
後編描く励みにしますのでどうぞよろしくお願いします！
発行後時間経ってても嬉しいです～!!

奥付専用のコメントフォームに飛びます。
Twitter記載のフォームもありますのでそちらからでもどうぞ。

https://goo.gl/forms/bGeBQeE7usWJITW33

pixiv：137756
twitter：baa_baa_baa

転載・複写・ネットオークション・フリマアプリへの出品は禁止です。
発見した場合然るべく対処いたします。
返金には対応しておりません。